

語りかける行為と心理臨床

原口芳明

学校教育講座(心理学)

Calling Action and the Practice of Clinical Psychology

Yoshiaki HARAGUCHI

Department of School Education(Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 語る行為

「語り」は心理臨床においても近年重要なテーマとして取り上げられている。そのアプローチの仕方は、たとえば「語られた言葉をどのように理解していったらいいのか、どのように分析していったらその理解を深めていくことができるのか」(能智正博, 2006)¹⁾という問いに代表されるようなアプローチである。これらは主に語りの内容についての分析が中心であるといえよう。

こうしたアプローチが重要であることは、相当の数の研究が報告されていることから明らかであるが、筆者がここで特に問題としたいことは、語られた内容ではなく、人が誰かに何かを語るという主体的行為、つまり語る行為に視点を置いて考えることである。

このことは、語りの内容をいったんカッコに入れたうえで、語る行為のあり方をみることに意味があるとするのである。

たとえば、サリヴァンが精神医学的面接は verbal communication ではなく、vocal communication であると指摘したのはよく知られている。「・・・精神医学的面接とはなによりもまず音声的コミュニケーションの問題である。コミュニケーションとはなによりもまず言語的だという思いこみはきわめて重大な誤りではなからうか。述べられた命題文のほんとうのところは何であるかをおしえるのは、言語にともなう音である。²⁾」サリヴァンは面接のなかで相手の声の「音調変化」(tonal variation) に敏感に耳を澄まし、それが起こりだした時点でそうっとそのことを相手に示すという。

このことに関連して前田重治(1999)は次のように指摘している。「面接で、時がいたるまでは、また相手によっては、面接者が何を語っているかという内容よりも、どんな態度や口調で喋ってくれたかという『語る行為』の方が印象に残ることも少なくない。これはサリヴァンが、面接においては相互に語り合うなか

で、言葉の意味内容よりも またそれとともに 言葉の『音声的』な響きを重視していたことにも関係するものである。³⁾」

ここでは、面接者の「語る行為」についても触れられていることが印象的である。語る行為は、面接のなかでは、相互的なものであることをおさえたうえで、では、そこにおいて語ることの意味とは何だろうか。

まず重要なことは、心理臨床の活動のなかにおいては、語ることは単に相手に情報を伝える、といったことではないことである。語ることは、相手(聴き手)に自分の思いを伝えようとすることである。そうすることで、相手に自分の思いを分かってほしいのである。この時、伝えられたものはその思いのすべてではないかもしれない。それゆえ、あれこれとことばを重ねて、相手に自分の思いが伝わるようにするのである。

一方、聴き手に語り手の思いが一挙に分かるとは限らない。聴き手には何かもやもやとしたものが胸に湧き上がってきたり、色々な思いが揺れ動いたり、からだの微妙な感じが生じたりする。

こういう相互のプロセスのなかから、とりあえずの何らかの一つの結節点が生まれてくる。つまり、なるほどと納得したり、共感したり、あるいは適切なことばを探したり、相手に尋ねたりする。改めて言えば、こういうプロセスのなかで、語ることは、相手(聴き手)に納得して貰うよう働きかけることである。

ことばのいのちとしての「語る力」の意義をくり返し強調している竹内敏晴は、『ことばが劈かれるとき』の最後の部分で折口信夫の言葉を紹介している。折口によれば「かたる」とは「相手の魂をこちらにかぶれさせる、感染させるといふことなのです。親鸞上人の遺文を見ますと、自分が法然にかたはれまつつたといふやうに書いてあります。つまり法然上人に騙されて、私は浄土信仰に入ったのだけれど、是が却つて幸福だ(中略)と、斯ういふことです⁴⁾」。

ここでは、こういう「語る」力を念頭に置いたうえで、語る行為とは語りかける相手に何らかの影響を及ぼすことであり、さらに言えば、相手を変える力をもつもの、とひとまず規定しておこう。

2. からだが語る

語りを語る主体の行為としてみると、語る行為（あるいは語らない行為、語れない行為）のなかに、その主体の様々なこころのゆれや葛藤、障碍といったものが垣間見られる。

典型的なのは何らかの心理的な理由から語る（声を出す）ことができない場合である。たとえば、筆者がスクールカウンセラーとして勤めていた中学校に在籍していたある緘黙の女子生徒の場合。学校ではひと言も話さず、教師とのコミュニケーションはわずかな頷きや表情をとおしておこなわれているとのことであった。しかし家ではお喋りするという。筆者はこの生徒には直接関わっておらず、担任の先生からの情報であったが、敢えてことばを喋ることを求められない状況のなかでそれなりに適応して学校生活を送っている様子だった。ある日、教師たちの下校指導につきあっていた時、この生徒が好きな男の教師に出会う場面に遭遇した。ふだんの表情の少ない様子からは想像できないような、とても嬉しそうで恥ずかしそうな表情をしているのに驚いた。この時も、彼女は一言も語ってはいないのだが、彼女の気持ちはからだにしっかりと現れていた。彼女はからだ全体で語っていたのである。その彼女の気持ちを周りの教師たちにはよく分かっている、なかば冷やかすような、しかし暖かい声をかけていたのが印象的であった。

別な例をあげれば、重い障害のために語ることが困難である場合である。筆者が関わっている子どもの多くが寝たきりで、生活する上で全面的な援助を必要とする子どもたちであり、言語的なコミュニケーションをとるということは難しい。とくに呼吸が浅い子どもの場合、声もなかなか出にくい。だが、彼らとつきあっていると、やはり、からだ全体が多くのことを語っていると感ずることがしばしばである。その時々自分の身心の状態、天候の状況、周りの様子、関わってくる援助者の態度 こうしたことをからだをとおしてとても繊細に受け取っていることが伝わってくる。彼らへの援助は、まずはからだが楽になることを目指されるが、その時手がかりになるのも、やはり、彼（彼女）がからだで語っていることである。そのからだが語っていることを読み取り、適切な援助をすることが援助者の課題になる。たとえば、子どもの表情や姿勢の様子から、呼吸が浅くて苦しい、もっとゆったり呼吸したい、という子どもの思いが伝わってくる。ベテランの援助者は、瞬時にこういう状況に対してからだで反応し、適切な身体部位に触れ援助する

ことが出来る。子どものからだの語りには響き合うような援助者のからだのあり方があるのである。さらに言えば、この時子どもと援助者の両者は別々の存在というより、一体となって呼応する存在であると感じられる。

ピンスワンガーは「ことばが沈黙する時からだが語り始める⁵⁾」と述べたが、人のからだは雄弁にその人を語っており、表層的な言葉よりからだが語ることばがより真実を伝えていると感じられることは少なくない。

3. 声という問題

「語りにおいて、言葉は意味を含むものとしてだけでなく、声としても発せられる。そして声は、語りにおいて意味を超えた力をもつ。臨床の言葉について考えるときに、語りの〈意味〉(text)についてのほかに、語りのこの〈声〉(texture = きめ)についても考えておく必要がある⁶⁾」と述べられているように、まず語る声について考慮しておく必要がある。

(1) 声を出す

声を出すのは出す人の主体的な行為であるが、その声は出されたとたんに言わばその人のものではなくなり、人と人のあいだで一定の意味を帯びたメッセージとして位置づけられるか、あるいは、外部の空間に消えてしまう。

語る（声を出す）主体の側から言えば、語る（声を出す）という行為は自分の考えや思いを相手に伝え、相手に影響を与えようとする行為であり、そこから、相手との間で様々なやり取りが展開しうる。

しかし、ことはそう単純にはいかない。声を出そうと意図することと、実際声を出すこととのあいだには幾重もの心理的・社会的障壁がある。

声を出す行為は、「ここに我在り」ということを他に対して明瞭に示す。このことを田中智志(2005)は「自己の存在開示としての声⁷⁾」と呼んでいる。ところが、まさにこの存在開示のゆえに、人によっては、あるいは、ある状況においてはあまりにも自分を周りの他者に対して開示しすぎる、と感じられるという事態が生じ、声を抑制しようとすることになる。

声を出すということは人間にとって必ずしも簡単なことではなく、様々な心理的な圧力がかかるのである。たとえば、集団の雰囲気なかなか自由にものを言えないようなものである場合、あるいは、ある特定の声の大きなメンバーが場を支配しているような場合、あるいは、沈黙していれば何事もなく過ぎてゆくような状況があった場合、声をあげるということは勇気がいるのである。

(2) 声を出せなくなる

臨床心理学者の湯浅園子は次のような自己体験を語っている。小学校4年生の時、学芸会に向けての合

唱練習の際、音楽の教師に、あなたの声は調子がはずれている、これからは声を出さないで口は歌詞通りに大きく動かしなさいという意味のことを言われた。それ以降、彼女は人前で歌を歌っていない、歌おうと決心しても声が出ない、という⁸⁾。「教師の一言、一つの行いがどれほどその子どもを傷つけ、生涯にわたる負い目を背負わせるものなのか」と湯浅自身が述べているように、これは教育という名のもとにおこなわれた暴力であり、極端な言い方をすれば「声の殺害」である。

通常は自然な形で声が出るように人のからだはできている。にもかかわらず、声が出せなくなるということは、抑圧し傷つける圧倒的な力の存在を示唆している。こういう暴力は絶対に許すことができない。が、現在でも学校教育の場で再現されているのではないかと気になる。

からだを基礎にした心理療法「バイオシンセシス」の創始者である Boadella, D は、子どもが成長するなかで自分の感情を抑えるようとする時、最初に身につけるのは自分の呼吸を止めることだ、と指摘している⁹⁾。息を止めることによって、自分の感情を自分から切り離すという心理的機制が生まれてくるのである。このようなプロセスをとおして、自分のからだとの自然なつながりが切れてしまうと、自分の感情を生き生きと感じることが出来なくなってしまい、他方では、糸の切れた凧のように自我のコントロールからはずれたイメージだけが勝手に動きまわる、といった状態が生じてくる。心とからだ解離した状態である。Boadella はからだと心とを結びつける呼吸へのアプローチによってこうした解離状態を治療している。

このことと直接は関係しないが、子どものからだの状況という点では重なるところがあるのは、口を開けずに喋る子どもの存在である。竹内敏晴が最初そういう子どもと出会い、報告した後4、5年たってから、現場の教師からそういう報告を次々受けるようになったという¹⁰⁾。筆者がある小学校教師に聞いた話では、数は少ないが確かにそういう子がいるという。この場合、歯を閉じた状態で声を出そうとするので、十分息が外に出ないことになる。つまり息が吐けない状態である。

(3) 声が出る

「声を出す」という行為は声を出す人の主体的な努力がもとになっている。これに対して、「声が出る」という行為はより自然である。たとえば、驚いた時、喜んだ時に出る嘆声、あるいは、あくび、くしゃみ、うなり声、笑い声、叫び声等々。これらは主体がコントロールして出す声ではなく、思わず出てしまう音声である。こうした自発的な音声は無意識のうちに人を癒す力を持っている。

ダイアン・オースティンの「ボカール・セラピー」では、これらの音をなすがままに出すというエクササイズをとおして、人格に本来備わりながら抑圧されていた自己の部分に関わりを持つことができ、自分のアイデンティティを拡大することになると述べている。彼女は「自分自身の声を再発見するためには、自分の体ともう一度つながることが必要¹¹⁾」と述べているが、声の基盤としてからだとつながることの意義はとても重要であることを筆者も実感している。

4. 声のワーク

ここでは、声を出すこと、あるいは声にふれることを意図した心理臨床的なアプローチのうち、筆者が体験したワークに即して述べたい。

(1) 声の対話: これは筆者がゲシュタルト・セラピーのスーパーヴィジョンを受けた時、「エンブティ・チェア」の技法を使ったおこなったワークである。ワークはその時筆者が感じていたこわばったからだの感じについて語ることから始まった。その感じを強めるためからだ全体に力を入れてみたところ咳が出た。今度はその咳を強調してみるが苦しくなる。「アーツ」という声なら楽に出る。この後、咳(苦しい声)と、「アーツ」という楽な声という対極性(polarity)のある二つの声のあいだの対話が展開していき、「咳になる¹²⁾」と苦しいが「これが俺なんだよ。楽になんかならなくてもいいんだ」ということばが出てきた。更に対話が続けると今度は「自分で自分を苦しめているんだ」という先程のことばを批判することばが出てきた。

このプロセスから筆者が感じたのは、どちらかの声に同一化するのではなく、そのあいだにとどまるということが、その時の自分にとって意味があるとういうことであった。また、咳と「アーツ」という声は、筆者自身が日頃体験することがある自分の声への違和感とつながっていると感じられた¹³⁾。

(2) オーセンティック・ボイス: 表現アートセラピーにおけるワーク¹⁴⁾。二人組になって一人が床に仰向けになり、出したい声を出してゆく。もう一人はそれを聞きながら見守る人(witness)になる。あるワークショップで、筆者は声を出しているうち泣きたくなった。だが、出てきたのは妙に甲高い声で気になった、と後で見守ってくれたペアの witness に言われた。このことは、筆者に声をあげて泣くという体験の記憶がないことに気づかせた(無論幼児期にはそういう体験はあったに違いないが)。ワークの後筆者自身このことは気になった。恐らく習慣化した感情体験のあり方が強く影響していること、さらにその背後には「男は泣かない」という文化的社会的な規範が働いていると考えられる。

なお、ここでは「オーセンティック・ボイス」だけ

を取り出して述べたが、ワークショップ全体は一週間にわたっておこなわれたもので、このワークのなかに潜在していた未完の体験はその後の他のワークのなかで何度か触れられることになった。

このことに関して、表現アートセラピーの創始者であるナタリー・ロジャース¹⁵⁾はワークのガイドラインのなかで次のように述べている。「(エクササイズをとおした)これらの経験は多くの感情を掻き立てる。あなたは泣いたり、大きな声を出す必要があるかもしれないが、そのことはあなたがクリエイティブ・コネクション¹⁶⁾の過程に没入する際に、非常に有用である。」

(3)「音色で伝え合う」：これは増井(2007)が提唱している「こころの整理法」の一つで、ペアになった相手に今の気持ちを音声で交互に伝えあうというもので、相手の気持ちを理解しようとしなくて、自分のなかに起こってくる気持ちの音色に集中することが特徴である。このやり方がある小学校でのカウンセリング研修会のプログラムの一部として取り入れてみた。結果としては、とても楽しみながらやった教師と、どうしても相手の音声の意味を考えてしまい、それに応えて自分の音声を出す教師とに分かれた。ワークのねらいは、「言葉が主に言語論理に従う知的作業であるのに比べ、声や音色は心のベーシックな感情に結びついている¹⁷⁾」ので、言語を使わずに心を音や音色にして伝えることで、「心の裾野が」広がる体験を味わうことである。無心にやってみると、たしかに声の独自の色合いや肌つやとでも言えそうな性質を味わうことができ、体験世界が広がる感じがする。

以上のワークをもとに声のワークの意義を述べれば、声はからだに根ざしているがゆえに身近な存在である。だが、身近であるために逆に気づかれにくい面も持っているのかも知れない。いずれにせよ、声を媒介にすることによって、からだにしっかり基礎を据えたアプローチが可能になると考える。

5. 呼びかける声

(1)声に関わる実践のなかで筆者が最も影響を受けてきたのは、竹内敏晴の実践である。竹内の実践は「からだとことばのレッスン」と呼ばれている。その内容はこれまで多くの著作をつうじて知られているが、最近久しぶりに何度か氏のレッスンに参加するようになって、改めて見直してみると、レッスンの内容が以前と変わってきていることに気づく。勿論、基本のところは変わらないが、参加者たちとの関わりのなかから、粘り強く変化を続けている氏の実践には驚かされる。

ところで、竹内は「声」、「ことば」について次のように述べている。「『からだとしてのことば』と

は、・・・、より根源的には話しことば全般を想定して語ったのであった。それは、話すという行為は声という肉体の振動に根ざす、ということによるのみではなかった。主体が他者に触れようとして働きかける時、その『からだ』全体の働きかけのうち、音声的な部分を『声』『ことば』と名づけているに過ぎない、と私は考えるからである。¹⁸⁾

ここで重要なのは、語る(話す)行為が他者への働きかけとして位置づけられていることである。前節でみた「声のワーク」の場合は、声は誰か特定の他者に対して向けられたものではなく、声自体のなかに潜在している心理学的な要素を取り上げ、アプローチしたものである。これらのワークはそういう枠組みのなかでのねらいを持っている。これに対して、竹内のレッスンではつねに他者への働きかけが目ざされている。

(2)さて、ここでは氏のレッスンのなかから「呼びかけのレッスン¹⁹⁾」と名づけられたレッスンについて氏の本から引用しつつ述べる。レッスンの基本的な形は次のようである¹⁰⁾。

〔レッスン参加者は部屋の左右に分かれ、まん中をやや広くあけて坐る。その中の空間の一方に、まず一人、話しかけ手が立つ。残りの空間に5人ばかりの聞き手が勝手な位置に勝手な方向を向いて坐る。〕

話しかけ手は、聞き手の中のだれか一人に短いことばで呼びかける。聞き手は、ひとりひとり別々の方向を向いたまま話しかける声を聞く。その際ことばの内容には一切かかわらず、ただ自分に話しかけているかどうかだけに注意を集中する。

両側に分かれてレッスンの進行に立ち会っている周囲の人々は、話しかけ手がだれを目指しているかを注意深く観察することが第一の課題になる。次に、話しかけ手がどのような身動きをして呼びかけたかに気づくこと。〕

このレッスンに参加し、観察する側にいると、語り手の身動きから誰に声をかけようとしたかは大体分かるし、微妙な身動きの仕方が話しかける声に影響する様も見えてくる。また、聞き手になると、話しかけ手の声が、たとえば、「こちら辺をこっちの方へ行った」とか、「自分の方に来たかな、と思ったけど、途中で落っこちてしまった」といったありありとした方向性や性質をもったものとして体験される。一方、話しかけ手になって誰かに声をかけてみると、目当ての人が自分に話しかけられた、と報告することは少なく、多くの場合、上に述べたような聞き手の反応が返ってくる。そのことで話しかけ手は頭をひねり、再度試みってみるがなかなか思うようにはいかない。周りで見ている人たちや竹内氏の指摘を聞いて、ああそうなのか、と自分の話しかけ方の癖や問題点に気づかされること

が生じる。だが、気づいたからといって、すぐさま話しかけ方が変わるとは限らず、頭をかかえてしまうこともある。筆者もそうだった。

筆者にとってこの「呼びかけのレッスン」は「お前の呼びかけはちゃんと相手に届いているのか？」とその都度鋭く問いかけられるようなものである（そのことは多くの参加者にとっても同様であるようだ）。

この問いかけに対して個人的には、日常の具体的な場面で答えていくしかないと思う。

(3)「呼びかけ」ということの意味についてもう少し検討しておきたい。

竹内は哲学者の木田元との対談の中でこのレッスンについて次のように述べている。

「レッスンをやっているとわかるんですが、呼びかけるとするのは簡単なようではなかなかできない。…(中略)・・・逆にそこにいるある人のからだにひきつけられる ということは、その存在が呼びかけてくる。で、これに応える。向こうから呼ばれたから声に応えるという関係が築かれて、はじめて呼びかけは成り立つ。」

「なんであの人に声をかけるのか。それは、あの人からだがこちらのからだに呼びかけるからです。そこにある種の響き合いがある。このときこちらが出ていく行為が呼びかけになる。呼びかけたときにはじめて、はっきりと具体的に相手が、『あなた』がうまれて、同時に『呼びかけている私』もそこにうまれてくる。²¹⁾」

このことばには驚いた。話しかける、というのは自分の主体的な行為だとする立場からは、なかなかこういう考えは出てこない。「その存在が呼びかけてくる」、「あの人からだがこちらのからだに呼びかける」ということ。このことを感じ取れることがとりあえず課題だと思えるが、一方、日常の場面では、そういうことは何となく感受して動いているようにも思える。そうだとすると、問題の一つは、そのことをより明瞭に把握することだとも思える。また、日常のなかで、主体 客体という二元論的な発想から自由になる感覚を持つことも大事な課題であろう。

(4) だが、「呼びかけ」の意味はそう単純ではない。竹内はメルロ＝ポンティが晩年のソルボンヌ大学での講義の中で、それまでの彼の言語論（「真正の」ことばである第一次言語、制度としての言語である第二次言語）に付け加えたのが「呼びかけ」だと指摘し、前二者が「話す主体」中心の考察であるのに対して、「呼びかけ」は「他者とのかわりにおけることばの成立、言いかえれば間主観性 間身体性に視野をひろげての言及なのだろう」と示唆している。

竹内がメルロ＝ポンティの晩年の思想を一つの手が

かりにしながら「呼びかけ」についての思想を深めている様子がうかがわれる。ただ、竹内自身も言うようにメルロ＝ポンティは「呼びかけ」について思考を展開していない。それゆえ、ここは竹内自身のことばを手がかりにするしかない。

(5) 声とは人が人にじかにふれてゆく仕方そのもの、人と人との関わりの原点²²⁾である、と竹内は言う。この「じかに」というのが重要なキーワードではなからうか。

このことばから筆者が連想することの一つは『ことばが劈かれるとき』のなかで述べられている弓の稽古のことである。竹内は旧制高校生の時、弓術選手であり、寒稽古で夜中の零時から24時間、つづけざまに弓を射て、一万一本を引く、という荒行をやった。この時の体験を竹内自身から直接聞いたことがあるが、弓を支えて伸ばした左手の手のところが的の中に入って見えるので矢が的を外れることがなかった、という。

つまり働きかける対象がすぐそこにある（見える）という事態。これは「その存在が呼びかけてくる」というあり方と近似した体験だと言えるのではなからうか。ここで、現れてくるのが「じかに」という体験の仕方ではないか。

(6) 本論は語りかける行為における主体的な側面から考察を始めたが、竹内のレッスンから示唆されることは、語りかける行為におけるより根源的な契機である。つまり、語りかける行為とは、最初から主体的な行為として成立しているのではなく、生きたからだをそなえた人間が相手の呼びかけを感受し、応答する(response)行為として初めて成り立つということである。

相手からの呼びかけに応答するこうした「応答する力」(responsibility: response + ability)は、相手に対する「責任(responsibility)の在りかを示唆している。「応答する力」は、心理臨床の営みにおいても最も基本的なもののひとつであろう。

そのように考えると、たとえば、レヴィナスの次のような言葉は、竹内敏晴の「呼びかけ」と何処かで通じるものがあるような気がする。

「苦しみをもたらす悪 一方的に受身の状態、無力、自己放棄、孤立 とは、同時にまた一人では担いきれぬものであり、半ば開かれたものとなる可能性を生むものではないだろうか。より正確に言えば、嘆き声や叫び声、うめき声やため息が発せられるところではどこでも、手助けと治療者の援助と、その他者性と外在性が救済を約束するような他の自我からの支援を求める、原初的な呼びかけが存在することが可能となるのではないだろうか。²³⁾」

いきなりここでレヴィナスの言葉を引用するのは強

引かもしれない。レヴィナスの言う「原初的な呼びかけ」と竹内の言う「呼びかけ」は同じではない。にもかかわらず、この言葉が意味深いと感じられるのは、竹内の実践も、他者からの「呼びかけ」に対して鋭敏に開かれているということ、さらに、「嘆き声や叫び声、うめき声やため息が発せられるところ」に共に居続けようとする態度において共通するところがあると思われるからである。

注及び文献

1. 能智正博(2006):「序 心理学と<語り>の出会い」(能智正博編『<語り>と出会う』, ミネルヴァ書房, p.4)
2. Harry Stack Sullivan(1954):The Psychiatric Interview,The William Alanson White Psychiatric Foundation(H. S. サリヴァン/中井久夫他訳:『精神医学的面接』, 1986, みすず書房, p.25)
3. 前田重治(1999):『「芸」に学ぶ心理面接法』, 誠信書房, p.170
4. 竹内敏晴(1988):『ことばが劈かれるとき』, ちくま文庫
5. Ludwig Binswanger(1947):Ausgewählte Vorträge und Aufsätze.(ピンスワンガー/荻野恒一他訳:『現象学的人間学:講演と論文』, 1967, みすず書房, p.199)
6. 鷺田清一「臨床と言葉 『語り』と『声』について」(河合隼雄・鷺田清一(2003):『臨床とことば』, TBS プリタニカ, p.225)
7. 田中智志(2005):『臨床哲学がわかる事典』, 日本実業出版社, p.80
8. 湯浅園子(1992):『アーベル指輪のおまじないー登校拒否児とともに生きて』, 岩波書店, p.16
9. Boadella,D. The language of Bio-energy. In Kogan, G(Ed.) Your Body Works: A guide to health energy and balance, And/Or Press, 1980. p.6.
10. 竹内敏晴(2007):『声が生まれる 聞く力・話す力』, 中公新書
11. 関則雄編(2008):『新しい芸術療法の流れ クリエイティブ・アーツセラピー』, フィルムアート社, p.101
12. ゲシュタルト・セラピーでは「~について語る」のではなく、それになって演じること(enactment:行為化)することをしばしばおこなう。ここで咳に「なった」のもこのenactmentである。
13. 原口芳明(2006):からだとエンブティ・チェア, 現代のエスプリ, 467(『エンブティチェアの心理臨床』), p.96-106,
14. 小野京子(2005):『表現アートセラピー入門』, 誠信書房, p.119
15. Natalie Rogers(1993):The Creative Connection; Expressive Arts as Healing, Science & Behavior Books,(ナタリー・ロジャーズ/小野京子・坂田裕子訳:『表現アートセラピー』, 2000, 誠信書房)
16. 「クリエイティブ・コネクション(Creative Connection)」とは, ナタリー・ロジャーズが提唱する自己探求の方法である。
17. 増井武士(2007):『こころの整理学』, 星和書店, p.150-156
18. 竹内敏晴(2001):『思想する「からだ」』, 晶文社, p.112
19. 以前は「話しかけのレッスン」と名づけられていた。この名称の変更のなかに竹内の思想の深まりが反映されていると感じられる。
20. 竹内敏晴(2007)前掲書(10), p.132~133
21. 木田元・竹内敏晴(2003):『待つしかない, か。21世紀身体と哲学』, 春風社, p.202
22. 竹内敏晴(2007)前掲書(10), p.163
23. Arthur W. Frank(1995):The Wounded Storyteller, The University of Chicago(アーサー・W・フランク/鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手』, 2002, ゆるみ出版 p.241)

(2008年9月17日受理)

正誤表

著者：原口芳明

論文名：「語りかける行為と心理臨床」、愛知教育大学研究報告、第 58 輯（教育科学）

誤 正

p.6 2、右、下から 2 行目 「湯浅園子」 → 「横湯園子」

p.6 6、左、下から 5 行目 「湯浅園子」 → 「横湯園子」